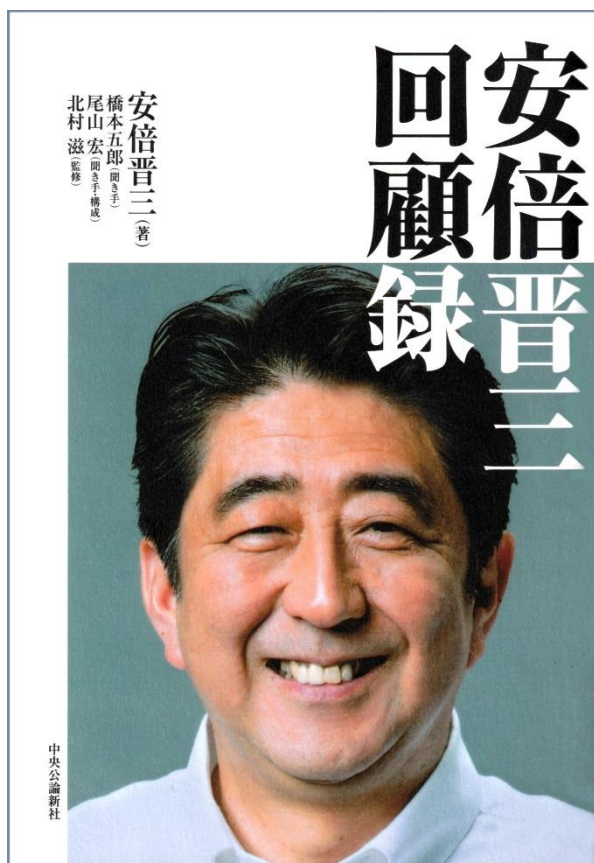


以下は令和6年7月1日発行 JMC ニュース 173 号の書評欄用に書いたが、諸般の事情で不採用になった原稿である。せっかく書いたので、ここに紹介する（2024年8月）。

~~~~~



## 安倍晋三 回顧録

著者：安倍晋三、聞き手：橋本五郎、尾山宏、監修：北村滋

発行所：中央公論新社 定価：1800 円+税 ISBN978-4-005634-5

2年前の2022年7月8日、安倍晋三元首相は凶弾に倒れた。わが国は憲政史上最高の政治家をあまりにも残酷な形で失ってしまった。

日本の歴代政権において、これほど高邁な理想と先見性のある国家戦略を掲げ、これほど命がけで国家改革を行い、これほど多くの素晴らしい功績を残し、これほど大きな足跡を世界史に刻んだ宰相は他にいない。同時にこれほど不当なバッシングといわれなき罵声を浴びせられ、これほど報われなかった宰相は他に例がない。

本書は、安倍氏退陣後の2020年10月から2021年10月まで18回、計36時間にわたって行われたインタビュー記録であり、政治家・安倍晋三の歩みと安倍政権の内幕が本人の言葉で平易に語られている。監修には安倍内閣で国家安全保障局長を務めた北村滋氏が当たっており、記録としても正確を期してある。

安倍氏の業績は、第1次安倍政権（2006～2007）での教育基本法改正、防衛庁から防衛省への昇格、国民投票法の制定、第2～4次安倍政権（2012～2020）でのアベノミクス、特定秘密保護法、日本版 NSC＝国家安全保障局の設立、米議会での「希望の同盟」演説、安全保障関連法、国際テロ情報収集ユニット（CTU-J）設立、伊勢志摩サミットとオバマ大統領の広島訪問、真珠湾での「不戦の誓い」演説、TPP関連法、新元号「令和」の制定など枚挙にいとまがない。なかんずく安倍政治の真髄は外交・安全保障にある。

国家政治の要諦は安全保障にある。ウクライナを見るまでもなく、安全保障がなければ経済も社会保障もないからである。チベットや新疆ウイグルを見るまでもなく、侵略された民族はもっとも大切な自由を失うからである。現代日本の最大の脅威はもちろん不倶戴天の敵・中国である。

安倍氏は通算 3,188 日の在任期間中、98 カ国 196 地域の海外の首脳と会談を重ね、国際社会のリーダーとして圧倒的な存在感を示した。ともすれば目先の利益に目が眩んで中国にすり寄る各国首脳に、自由、民主主義、法の支配の普遍的価値を説き、「地球儀を俯瞰する外交」を展開して中国の脅威を粘り強く訴えた。

本書第 6 章では各国首脳とのやり取りが描かれる。伶俐なオバマ大統領や計算高いメルケル独首相が、最終的には安倍氏を全面的に信頼したこと。初めから友好的だったテリーザ・メイ英首相から日英同盟の復活を持ちかけられたこと、同じく友好的だったアボット豪首相や、安倍氏を師と仰ぐモリソン豪首相との交流によって豪州が準同盟国になったこと。加えてモディ印首相との深い信頼関係が、「自由で開かれたインド太平洋」構想から日米豪印からなる QUAD となって結実した。トランプ米大統領との蜜月はつとに有名だが、外交面ではトランプ氏もまた安倍氏に教えを請うた。「シンゾーはどう思う？」が彼らの決まり文句であった。

本書の末尾には、増上寺での葬儀における麻生太郎元首相の弔辞、日本武道館での国葬における岸田文雄現首相と菅義偉前首相の弔辞が掲載されている。麻生氏と菅氏の万感の思いを込めた言葉はいまなお涙なくして読むことができないが、岸田氏の挨拶もまた素晴らしいものだった。

本書はどこを読んでも興味深く面白いが、安倍氏自ら語ったものなので、安倍政権を評価する材料としては十分でない。氏は自身の功績を決して誇示しないからである。安倍政権の功績の総括としては、深田 匠著『安倍晋三元総理追悼論』（高木書房刊、以下「追悼論」）が群を抜いており、強くお勧めしたい。本書評の2段落目も「追悼論」から引用・改変したものである。

わが国の安全保障を立て直した安倍氏は、それ故に反日左翼メディア・政治家・「知識人」と彼らに操られる情弱層から憎まれ、卑劣かつ執拗な攻撃を受けた。「追悼論」には、いわゆる「モリカケサクラ」がいかに悪質なネガティブ・キャンペーンであったかも詳述されている。

安倍晋三元総理の偉業に国民の一人として深く感謝するとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。